



# 神経病態解析学

本セミナーは、HBS研究部・神経病態解析学分野（准教授・笠原二郎）が不定期に主宰するセミナーシリーズで、聴衆（特に若者）への刺激とブレインストーミングを目的に、ジャンルを問わず各界の最前線でユニークな活躍をされている方々をお招きし、お話しして頂きます。研究部の多くの学部生・大学院生・教職員の参加をお待ちしております。

awajiroの  
わがままセミナー

## セミナー シリーズ

連絡先：笠原 二郎 awajiro@ph.tokushima-u.ac.jp  
Tel&Fax: 088-633-7278 (学内: 6256)



わたなべ よしひさ

### シリーズ第6回 演者：渡邊 義久 博士

京都府立医科大学・大学院医学系研究科・基礎老化学・助教  
<http://www.kpu-m.ac.jp/k/cellbio/>

### 演題：アルコール依存と RNA 編集

開催日時：2011年4月15日（金）17:00~18:30

開催場所：薬学部 2F 多目的室（スタジオプラザ2F）

**渡邊義久博士は、黎明期の奈良先端科学技術大学院大学で研鑽を積まれて学位を取得された後、様々な中枢神経疾患の病態解析に関する基礎研究を、主として分子細胞生物学的手法を用いて展開されている気鋭の仕事人研究者です。**

#### 講演要旨

社会のグローバル化に伴い覚醒剤等の薬物がより身近な存在になっており、若年者の薬物乱用が社会問題となっている。最近では、薬物依存だけではなく、社会の豊さが生み出した新たな依存（ギャンブル、ネット、携帯、ジャンクフード、ショッピング依存症）も注目されており、「人はなぜ溺れる（依存する）のか?」、「多様な依存の形成過程で共通のメカニズムはあるのか?」など幅広く依存症が研究されている。このような依存症に陥る要因としてストレスが挙げられる。アルコール依存では、このようなストレスを緩和するために飲酒に頼り、最終的にアルコール依存症に罹患する。ストレス社会と呼ばれる現代においてアルコール依存者数は増加しており、アルコール依存症の疑いのある人は440万、治療の必要なアルコール依存症患者さんは80万人と推計されている（KASTにもとづく厚生労働省研究班調査, 2004）。

アルコール依存に関する研究は古くから行われているが、未だその詳細なメカニズムは分かっていない。我々は、アルコール依存形成のメカニズムを解明するために、アルコール依存モデルマウスを作製し、脳内モノアミンおよびその受容体の動態解析を行っている。セロトニン2C受容体（5-HT<sub>2C</sub>）はアルコール依存形成により側坐核や背側縫線核で発現が亢進し、そのアンタゴニストは自発的な飲酒行動を抑制する。5-HT<sub>2C</sub>のmRNAは、アデノシンからイノシンへRNA編集（A-to-I RNA editing）を受けることが知られており、この編集によるアイソフォームの発現変化と精神疾患との関わりについて多くの報告がある。本セミナーでは、アルコール依存形成におけるRNA編集の関わりについて最新の研究結果を紹介する。